

Beauty Innovation

あたらしい美が生まれる場所

特集－資生堂グローバルイノベーションセンター

2019年4月、横浜市みなとみらい21地区に株式会社資生堂の新しい研究開発拠点「資生堂グローバルイノベーションセンター」が開業した。「都市型オープンラボ」をコンセプトに、国内外の企業や大学、消費者とのコラボレーションによる、あたらしい美の創出をめざしている。

S/PARK

天井の照明は“インスピレーションが羽ばたく様”をイメージした「付箋」モチーフ

美のひらめきとの出会い

美の複合体験施設

「S/PARK」のコンセプトは、「美のひらめきと出会う場所」。施設名称には、「世界中から人々が集う“資生堂のパーク（公園）”と、「その出会いから生まれるインスピレーションが“スパーク”する場所」という2つの意味が込められている。

「ここでの体験が美について考えるきっかけとなり、何かひとつでもひらめきを得てもらえたらうれしいです」と、株式会社資生堂 S/PARK プロジェクトリーダーの久代哲之氏は話す。

資生堂は、洋風調剤薬局として1872年に創業し、化粧品の製造販売で世界ブランドに成長した。洋風レストラン「資生堂パーラー」や画廊「資生堂ギャラリー」など、創業初期から幅広く事業を展開してきた企業でもある。

「資生堂といえば化粧品のイメージが強いと思いますが、様々な製品・サービスを通じてお客様に“美”を提供している会社です。私たちが研究開発を通じて発見してきた多様な美を、S/PARKで体験していただくことで、資生堂って実はいろいろな面白いことをやっている会社なんだと知っていただけたと思います」

Inspiration for Beauty

研究施設である資生堂グローバルイノベーションセンターの1-2階は、美の複合体験施設として一般客に開放している。Cafe、Museum、Studio、Beauty Barの4つのエリアで、食やスポーツなど様々なアクティビティを通じて美を体験することができる。

“わたしにぴったりのきれい”と出会う

S/PARKでは、資生堂にとって初めての試みも行われた。そのひとつが、“マイコスメ（化粧水・乳液）”をその場で製造する「S/PARK Beauty Bar」。ビューティーコンサルタントがカウンセリングを行い、研究員が専用の測定器を使って肌を解析することで、一人ひとりの好みと肌に合わせた調合を決定する。その後、併設されたガラス張りの製造所「ビューティーバーラボ」で、特別なトレーニングを受けたスタッフによってその人だけのコスメが製造される。香りやテクスチャなどの“使用感”と“効果”の両面で自分にぴったりの化粧品をつくれることが話題となり、翌月の予約が5分で埋まるほど人気のサービスとなった。

「研究員が直接お客様とコミュニケーションをとって、その場で商品を作る、というアイデアは、研究員から出てきたものです。こんなことができれば面白い、お客様のためにやりたい、という彼らの想いを何とか実現させたいと思いました」と久代氏は語る。

実現は予想以上に困難だったという。解析から製造、提供まで一気通貫で行うには、薬機法の制約をクリアする必要がある、工場を新設するのと同様の届け出書類が必要とされた。

「日本ではここでしか受けられない特別なサービスが誕生しました。一人でも多くのお客様に体験していただきたいと思っています」



写真：山田新治郎(4～7、10～13 ページ)



S/PARK Studio

ランニングやエクササイズ、メディテーションなどの資生堂オリジナルプログラムを受講できる



S/PARK Museum

100年を超える研究の歴史を製品とともに展示。香りの調合など、体験型の展示も充実している



S/PARK Beauty Bar

しっとりやさっぱりなどの化粧品の使用感やボトルのデザインをビューティーコンサルタントと相談して決める



S/PARK Cafe

資生堂パーラーで経験を積んだシェフが考案したオリジナルメニューを提供する

Innovation for Beauty

株式会社資生堂は“美”を提供する会社として、製品・サービスの幅を一層広げていくことをめざしている。
資生堂グローバルイノベーションセンター（以下、GIC）建設プロジェクトは、あたらしい美の創出に向けた「研究スタイルの変革」への挑戦でもあった。

美の可能性を拡げていく

お客様との交流から生まれる「ひらめき」

「S/PARKをつくったのは研究員がお客様から気付きを得るためでもありました」と久代氏は話す。化粧品への評価は、肌がきれいになるという“機能価値”に加えて、使い心地が良い、香りで心が癒されるといった“情緒価値”も重視される。化粧品と薬ではそこに大きな違いがある。薬は多少塗り心地が悪くても効果があれば使い続けるが、化粧品の場合はすぐに別の商品に乗り換えられてしまう。

「情緒価値の高い製品をつくるには人の感じ方を知る必要があり、研究所では脳波を分析し、可視化・分析する研究も行われています。しかし、人と直接関わることでしか得られない気付きも多くあります。研究員がお客様と交流し、ひらめいたことを、研究開発に役立てていくことに期待しています」

都市の刺激をアイデアに変える

郊外から都市への移転も研究スタイルを大きく変える決断だった。

「あたらしい“美”を生み出していくためには、自分の研究だけに没頭するのではなく、様々なところに好奇心をもって自らアプローチしていくような研究スタイルに変わる必要があると考えました。そして新しい研究開発拠点に“都市型オープンラボ”というコンセプトを据えて移転場所の検討を行いました」

都市型にした狙いは、研究員の熱意やアイデアを刺激することにあった。ブランド力のある横浜にあって、力強く進化し続けているみなとみらい地区に通勤することで、最新のトレンドやライフスタイル、市場の空気を肌で感じることができる。

外部の発想を取り込む研究スタイルへ

研究スタイルの変革を伴って、GICがめざしたのは「多様な知と人の融合」する場所になること。研究所自体もまた外部とのコラボレーションを前提のつくりとした。4階には、研究所としては珍しい流通企業との商談スペースを設置したほか、外部研究機関との共同研究室も開設した。

GICの計画とともに異業種・異分野とのコラボレーションを促進する方針を大々的に告知したことで、オファーは急増しているという。

「2019年9月 から、“Wellness”と“Beauty”をテーマとした、スタートアップ企業とのコラボレーションプログラム『fibona（フィボナ）』を開始しました。あたらしい“美”がみなさまの元へ、どのようなかたちで届くのか、イノベーションの成果を楽しみにお待ちしております」



写真左：5階から14階の研究フロアでは、柔軟で多様な働き方を実現するフリーアドレスを採用し、研究員同士の知見の交換や発想の転換を促すための交流スペースも充実させた
写真右：外部研究機関との共同研究室。外部の研究員が常駐することでスムーズな連携を実現。複数の部屋が用意され、多様な観点での研究を同時に進めることができる



鹿島建物管理概要

管理開始 2018年11月
管理内容 統括管理、設備管理、清掃、警備
管 轄 横浜支社

建築概要

施設名称 資生堂グローバルイノベーションセンター
所 在 地 神奈川県横浜市西区高島一丁目2番11号
主要用途 研究所
設 計 鹿島建設株式会社
施 工 鹿島建設株式会社
面 積 全体敷地面積 約7,022㎡
延 床 面 積 約56,181㎡
構 造 SRC造・S造

主要設備概要

電気設備 受 電 容 量 22kV
スポットネットワーク2,000kVA×3回線
非常用発電機 ガスタービン1,500kVA
太陽光発電 10kW
衛生設備 簡易専用水道
上水受水槽 76.8㎡
中水受水槽 43.2㎡
高層、低層、研究用の推定末端圧力一定給水ユニット
研究用排水処理（中水源）
加圧浮上＋膜分離活性汚泥処理方式
空調設備 熱源（みなとみらい二十一熱供給より蒸気・冷水受入）
冷水熱交換器、温水熱交換器、エアハンドリングユニット、
ファンコイルユニット、パッケージ空調機、
恒温恒湿室用パッケージ空調機、パリメータ床電気ヒータ

TALK
TO 対談
TALK

都市型オープンラボの追求

SHISEIDO

GLOBAL INNOVATION CENTER



写真左より
株式会社資生堂
グローバルイノベーションセンター
S/PARK プロジェクトリーダー 久代 哲之 様

株式会社資生堂
GIC 統括部 総務管理グループ
グループマネージャー 田中 靖昌 様

鹿島建物総合管理株式会社
横浜支社 資生堂グローバルイノベーションセンター管理事務所
統括所長 山田 孝次

鹿島建物総合管理株式会社
横浜支社 事務部
部長 小林 圭介

人のチカラでまもる

田中様 鹿島建物さんには資生堂グローバルイノベーションセンター（以下 GIC）の設備・警備・清掃を横断的にみる統括管理者として、また、設備管理者として開業前の 2018 年 11 月から現場に入っていただいています。統括の山田所長は資生堂本社が入居している汐留タワーでの所長経験も長いと伺っていますのでたいへん心強いです。

山田 資生堂さんとの付き合いは長くなりますが、オフィスと研究所では管理のポイントが大きく異なります。新しい気持ち、新しい視点をもって管理に務めています。

小林 GIC に移ってから、場所・建物だけでなく、研究員さんの雰囲気も変わった気がしますがいかがですか？



写真左：実験廃液が発生する GIC では、排水処理設備の点検も念入りを行う



写真右：毎朝行われる、防災センターでの朝礼。資生堂の担当者も参加し、情報共有を徹底している

久代様 以前より活発にコミュニケーションがとられています。洗練された横浜の空気や、開放的な建物、お客様との近さが良い刺激になって、服装や趣味などの変化も感じます。

小林 管理スタッフも笑顔で活き活きと仕事をさせていただいているな、という印象を受けています。

山田 防災センターをすごくいい場所につくってもらっていて、その影響もあるかもしれません。管理事務所は地下や裏手にあることが多いのですが、GIC では、1 階にあって天井も高く大きな窓が 2 面にあり、すごく明るい。さらに、人の出入りや施設の状況を把握できますし、何かあったらすぐに駆け付けられます。



田中様 GIC は“人でまもる”施設にしたかったからです。研究所なので当然セキュリティは重要です。だからといって入口を機械でがらがちに固めてしまうと、管理は簡単ですが、“都市型オープンラボ”のコンセプトが崩れてしまう。オープンな雰囲気を保ちながら、まもるべきところはまもる、このバランスをとるのは人にしかできないと思っています。

小林 警備スタッフだけでなく、館内にいる全てのスタッフが研究所のセキュリティや館内の安全を意識する必要がありますと考えています。オープンな場所では、こちら人も人から見られるこ

とになりますから、身だしなみもきちんとしなければいけませんし、ここでは空間が自然と意識を変えてくれますね。

久代様 一般のお客様や研究員だけでなく、管理スタッフの皆さんにも“ひらめき”を感じていただけると嬉しいです。

山田 自分たちが施設のコンセプトをまもっていく、そういう意識があるのとないのとは管理の姿勢に差が出ます。人が入れ替わったりする節目に、ベテランも含めて施設のコンセプトや資生堂さんの理念を確認する機会をつくることを考えています。

田中様 今後は、省エネの提案もお願いしたいと思っています。研究に集中できる快適な環境が第一ですが、少しでも無駄を省いてもらいたい。

小林 現在、本社のエネルギーマネジメント推進室と協力して設備運転データの解析を進めているところです。オープンから 1 年経つと運転傾向が分かってきますので、具体的な削減余地、削減方法をご提示できるようになります。

田中様 資生堂は企業理念のなかで「People First」を掲げています。「People First」に見合った省エネのご提案をお待ちしています。

居心地のいい、 美しい空間を



風速 8m/s を目安にカフェテリア（従業員用）のテラス席パラソルをたたむ

設備も建物もあたらしくピカピカ。お客様も社員の皆さんも、この施設での時間をのびやかに過ごしていってほしいです。この“美”の空間に汚れや不便がないように管理スタッフ一同は、目を配り耳を澄まして管理にあたっています。